

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 33 回 「その先へ」

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

新型コロナウイルスの感染法上の位置づけが5月8日に季節性インフルエンザと同程度の「5類」に引き下げられてから1カ月余りが経ちました。スマートフォンの位置情報ビッグデータをAIで解析して実社会の人流データを分析しているクロスロケーションズの調べで、コロナ禍前の令和元(2019)年6月第1週の日曜日に比べ、今年6月4日日曜日の東京・新宿の人出は69.2%にまで回復していたことを、6月8日付『産経新聞』(東京発行)が報じていました。その調査によると、福岡市の中心街・天神65.0%、名古屋市75.1%、札幌市75.7%、大阪駅周辺の梅田76.2%、京都市84.2%と、多くの大都市で約7割から8割の水準まで回復していることが明らかになっています。

東京・銀座の中央通りを歩いていると、英語はもちろん、フランス語、韓国語、中国語など、様々な外国語が飛び交っています。歩道に横付けされた大型観光バスから降りてくるのも、色々な人種の人たちの姿があり、訪日外国人観光客(インバウンド)の賑わいが急激に戻っていることがよくわかります。

新宿や渋谷、池袋といった飲食店街にも、人々の姿が多く戻ってきていますが、コロナ前から常連だった酔客たち(すいきゃく)に話を聞くと、「この1カ月、赤ちょうちんに出入りするの、外国人が多い。横丁街の雰囲気は昔とは様変わりだ」という話が返ってきました。

飲食店から見れば、外国人であっても顧客が増えることは売り上げ増加につながるでしょうが、観光客ということは、常連としてのリピーターになる人は少なく、安定した営業につながっている店はそう多くはないものと思われます。

そうした中で、新型コロナの感染状況は、厚生労働省のまとめによると、穏やかに増加傾向にあるようです。全国約5,000カ所の定点医療機関が6月4日までの1週間に報告した新規感染者数は2万2432人で、1医療機関平均の患者数は前週に比べ、1.25倍に増えているそうです。決して油断はできません。このような状況を反映しているのか、個人の判断に委ねられているマスクの着用は、某システム開発会社の分析では、例えば大阪駅前の5月中旬の平日朝のマスク着用率は90%だったものが、6月初旬になっても84%にしか減っていないそうです。

筆者自身を振り返ってみれば、自宅では全くマスクをしていませんし、飲食店で会食する際にも外していますが、街を歩いている時や、電車やバス、タクシーなどの公共交通機関の中ではしっかりとマスクをしています。会食を伴わない座談や、人前で話をするときにも、ほとんどマスクを着けたままです。6月に入り、蒸し暑い日には、相手と距離がある時はマスクを外すこともあります。咳やくしゃみが出る場合には、再びマスクをするようにしています。

日本人はもともと、インフルエンザが流行る冬や、花粉が飛び交う春先には日常的にマスクをする人が多い民族です。そんなこともあってか、コロナをきっかけにほぼ全員がマスクを着けるようになった習慣はなかなか拭い去ることができません。「5類」引き下げが決まった時に「もう、マスクは一切しない」と話していた人の多くも、ポケットにはマスクを忍ばせていて、人前ではサッと取り出して装着する姿をよく見かけます。

3年以上続いたマスク生活の後遺症があるのは事実です。小学校の教員に聞くと「マスクがないと恥ずかしいと訴える児童が多い」との答えがよく返ってきます。これだけ長く続くと、マスクがない日常を想像できない子供たちも多いのでしょうか。また、この3年間、マスクをしていたおかげで、インフルエンザやその他の風邪、花粉症といったコロナ以外の感染症なども大幅に抑えられていたことは事実で、「感染予防の習慣が行きわたっているのだ」とみる医師も多くなっています。

そうした中で、これまでオンラインで行っていた会議は対面で議論し合うようになり、飲食店やホテルなどの宴会場では、感染防止の亚克力板が撤去され、これまで着席、ノンアルコールに限っていた会合を立食、飲酒付きで行うようになってきました。「やはり、直接会っていろいろな人が直接話し合う環境でないといいコミュニケーションはできない」という意見が支配的でしょう。

筆者が卒業した中学校の同窓会は、3年ごとに総会を開催していましたが、定例年にあっていた昨年は開催を断念しました。コロナの感染症法上の分類が緩和されるのを待って今年6月8日、ホテルの大宴会場で1年遅れの総会を開催しましたが、例年の倍に当たる約1400人が集まりました。芋を洗うような状態にもかかわらず、9割以上がマスクを外して、とても爽やかな笑顔に満ち溢れていました。数年ぶりに顔を合わせる仲間同士、「元気だったか」「年を取らないなあ」と旧交を温めていました。

これに先立って同日昼、同校の周年行事が系列校の大ホールで開催されました。そこでは、様々な来賓が祝辞を述べましたが、それと共に新しい周年記念歌が披露されました。音楽系のクラブの部員たち約30人が壇上で歌唱してこの歌を発表しましたが、1番、2番とメロディーに乗った歌詞が進んで行くにつれ、アリーナ席に座っていた生徒たちがその歌に感動したのか、1人、また1人と、だんだんと席を立って、壇上の部員たちの声に合わせて歌い始めました。3番までの歌が終わるころまでには、約700人の在校生全員が起立して大合唱になりました。歌い終わると、出席していた保護者や卒業生の大きな拍手にホール全体が包まれました。

式典後、出席者たちからは「自然に生徒が立ち上がっていく姿は素晴らしい光景だった。これこそ、コロナ明けを象徴している。オンラインの式典ではこんなことは起きない。人と人との直接のコミュニケーションこそ最大の教育だ」という意見が聞かれました。この歌の標題は「その

先へ」。コロナ禍を乗り越え、新しい時代を切り拓く決意が、この歌の力で生徒たちに伝わっていたのだろうということも容易に想像できました。

コロナ禍の中では飲食を伴う懇親会を省略して、オンラインなどで行われていた会議が、このところ従来通り対面で行われたり、ゴルフコンペなどでも、終了後のパーティでお酒を出したりするケースが急に増えてきました。3年間休会が続いていた様々な会合の復活が自白押しで、出席者数も多くなってきたのは、この3年間の自粛から解き放たれた反作用でしょう。しかし、会合が終わると、三々五々、マスクを着けて家路につく姿が多く見られます。そして、電車の中ではまだ8割以上の人たちがマスク姿です。穏やかに感染者数が増えている中、こうしたフレキシブルな対応が、これからの社会で、新型コロナなどの感染症と共存していくために必要なのかもしれない。欧米ではほとんどマスクが姿を消した（森林火災に見舞われたカナダ、米国ではマスク姿が一時復活しましたが…）現在、こうした日本の対応は世界中から見れば奇異に映るかもしれない。しかし、こうした取り組みや、自然に身に付いた習慣こそが、パンデミック（世界的大流行）後の復興を支える原動力になるのではないのでしょうか。

筆者は7月16日夕、東京・九段の靖國神社で開催されている、戦没者の霊を慰める「みたままつり」の最終日、境内の能楽堂で1時間にわたり唱歌奉納をします。ここ十数年、毎年繰り返していますが、今年こそは聴いて下さる皆さまが、コロナ禍を克服した新しい時代、「その先へ」の第1歩を踏む出すきっかけにしてくださいと考えています。